【国際教育協力活動報告】

カンボジアの子どもたちに学校体育を
――北部チョンカル村での運動会開催の試み――

海野勇三（山口大学教育学部教授 国際教育協力プロジェクト 体育担当）
入江航生（山口大学教育学部保健体育教室３年 学生ボランティア団長）

はじめに

これまで筆者らは「カンボジアの子どもたちに学校体育を提供したい」、「ゆきとどいた学校体育を」とまでは望まない（望めない）までも、せめて「必要にして最低限度の学校体育」をカンボジアの子どもたちに提供したいとの強い思いを胸に、山口大学国際協力活動推進プラットフォームおよび教育学部長裁量経費による助成を受けてカンボジアへの視察調査を続けてきた。そして 2013 年１月 22 日、ようやくカンボジアにおける学校体育の振興に対する教育協力の第一歩として、北部チョンカル村の学校クラスターの中核校であるチョンカル小学校にて全校運動会を開催するまでにこぎつけることができた。以下では、「カンボジアの子どもたちに学校体育を」をテーマに学生ボランティアとともに取り組んできた国際教育協力活動について報告したい。

１．これまでの経過と課題意識

チョンカル村で運動会を開催するに至るまで、三度にわたる課題探索的調査と一度の運動会開催構想をめぐる協議のために現地を訪問した。それら結果の詳細は、報告書（海野；2011、海野；2012）にまとめてあるが、ここで簡単にこれまでの経過について確認しておきたい。

１）第１次（2011 年３月）課題探索的調査

初めての訪問となる第１次探索的調査では、アンコールワットで知られる観光都市シェムリアップとその近郊エリアを中心に、小・中学校と教員養成所（PTTC）を視察し、関係者にインタビューを行った。その目的は、“カンボジアの学校で教育活動の一環としての「体育」が実施され定着していく上で、どのような条件が整えられる必要があるのか？”このことを自身の五感をフルに動員して感じ取ってくることであった。その結果、次のような実感を得た。

〇現地の子どもたちは猛暑の中じつに活発に運動遊びに興じていた。彼らの子どもらしい好奇心とバイタリティに触れた時、もし仮に学校がカリキュラムとして体育・運動遊びの指導に取り組んだならは、きっと子どもたちは嬉々として取り組むであろうことを確信した。

〇他方、学校の教師の実態は、子どもたちのあの笑顔と活動的な姿とは対照的に、どこか疲れているような、誤解を恐れずに言えば、教師という仕事を楽しめていないような印象を持った。確かに教室での座学では、黒板を背に授業をしているのだが、その授業にも「勢い」というものが感じられなかった。インタビューをしたところ、その背景には、教職による給与では家計が成り立たないため、ほとんどの教師は、始業前または終業後に副業を持っていて、したがって教材研究や指導力向上のための研修参加もままならないのが現状とのことであった（楠：2010、山口：2012）。

〇体育が教科として行われるには運動用具と運動するための施設が欠かせない。しかし、学校の道具不足は深刻で、シェムリアップ市街地にある大規模小学校（全児童数およそ 5000 名）でさえ、短なわとびが 10 本程度（柄の部分は破損している）、ボールが大小合わせて

12～13 個程度（ほとんど擦り切れ寸前、空気の抜けた状態）、それにフライングディスクが数枚あるのみであった。農村部の小学校にいたっては見るも無残な状態で、穴の空いてないボールがわずかに 1 個残っているだけであった。また運動施設に関しては、当然のことながら、体育館やプールなどは望むべくもないが、グランドと呼べる広さの校庭を所有している学校すらほとんどない。さらに適度な広さをもつ校庭にも、乾季の直射日光を遮るために枝ぶりのいい大木が植えてあったり、中央に水を汲む井戸が設置されていたりと、まとまったスペースもない状態であった。

○カンボジアには雨季と乾季があるが、乾季には強烈な太陽光が照り気温は 40 度を超える。子どもたちはその中でも嬉々として遊びに興じていたが、屋内体育施設が未整備の中、女性教師が強い陽光のもとで体育を指導することはおよそ想像できない。また雨期になると洪水で学校ごと浸かるという。気象的な条件は最悪とまでは言わないが、相当に厳しい（山口：2012）。

○家庭・保護者の状況に関しては、都市部と農村部の格差、富裕層と貧困層の格差が予想以上に大きかった。そのことは、保護者の教育への意識にも反映する。すなわち一方で都市部・富裕層に過剰な教育熱が認められる（⇒ダブルスクール・校区外入学など）反面、農村部・貧困層の中には学校教育への無理解も存在していた(⇒進級率・卒業率・進学率の低さ)。

以上が、第 1 次探索的調査で得た感触の概要である。この段階では、私たちにできる「支援」と「協力」の中身はどのようなものになるのか？に関しては未だはっきりとしないが、少なくとも、日本の現行の体育（の教育目的・教育内容・教育方法）をそのままカンボジアに持って行ったとしても決して効果を上げることはないであろうことだけは確認できた。同時に今後、カンボジアの生活現実に根差した体育（＝生活体育）の可能性を探っていくことの必要を痛感した。

２）第 2 次（2011 年 12 月）課題探索的調査

第 2 次調査では、シェムリアップから北へおよそ 130 キロあるチョンカル村とカンボジアの首都プノンペンを訪問して探索的調査を実施した。北部チョンカル村を訪問したのには訳がある。それは第 1 次視察調査でガイド兼通訳として同行してくれた V 氏の、帰国間際に発したさりげない一言（助言）がきっかけであった。V 氏によれば、私たち調査団が視察した「カンボジアの子どもと生活と学校」はあくまでシェムリアップのそれであり、「『本当の』カンボジアの子どもと生活と学校を知るには、もっと別の地域に足を踏み入れないと・・・・」と言う。その言葉の真意を尋ね直したところ、シェムリアップはカンボジアではアンコールワットへの観光の表玄関にあたる都市であり、すでに世界各国の NPO によって相当の支援が入っている。言い替えると、私たちが感じ取ったカンボジアの子どもたちの生活と学びと育ちの現状は、カンボジアでは条件的に恵まれた地域の現状なのであって、交通手段の整わない地方の村々では今なお支援がほとんど入っていない中、劣悪な条件に置かれている。V 氏はそのような地域にこそ目を向けて欲しいというのである。

また、プノンペンへの訪問には三つの目的があった。それは、

①この間、カンボジアで体育の振興のために熱心に支援活動に取り組んできた日本の NPO/NGO(Hearts of Gold)事務所を訪問し、支援の経過と現状に関し聞き取り調査および資料収集を行うこと、

②JICA 事務所を訪問し、カンボジアの学校教育に関する調査報告書の収集と国際教育協力にあたって踏まえるべき原則（的視点）について示唆を得ること、

③カンボジア初の教育学部設置構想及び教員養成制度改革の取り組みに関し聞き取り調

査をすること、

であった。詳述は避けるが、第２次調査から筆者は下図のようなある種の違和感を強く持った。すなわちそれは次の４点である。

①カンボジアへの国際教育協力は多くの国・団体・個人が多様な支援活動を展開している、

②しかし、それらは一定の合意された統一方針のもとで有機的な連関を持って実施されてはいないのではないか？

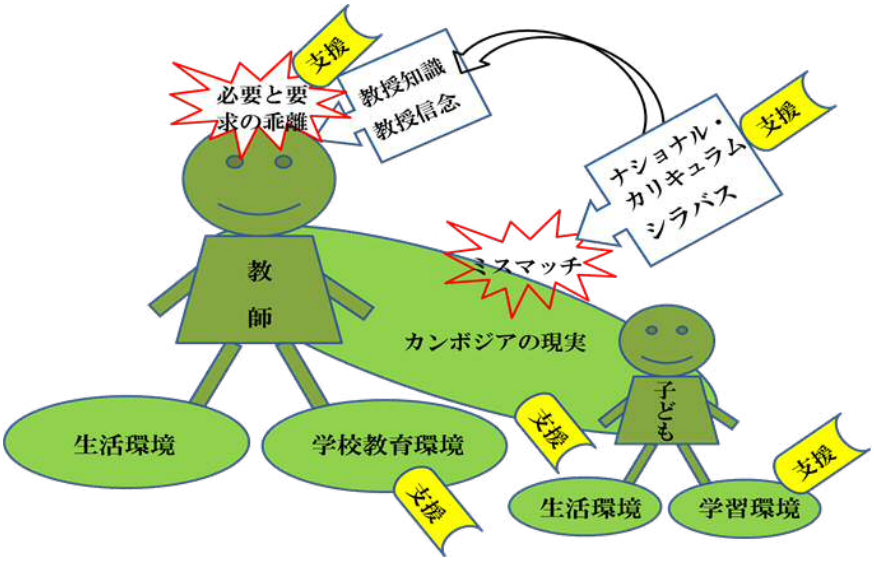

図１ カンボジアにおける教育支援の現状

③加えて、展開される支援活動が現地の実情や現場の人々の必要と要求にマッチングしていないものも少なくないのではないか？

④その結果、一つ一つの善意から発する支援が必ずしも有効に機能していない（=生きていない）のではないか？

ということである。もちろん国際教育協力のすべてがそうだというつもりは毛頭ない。しかし、第１次・第２次にわたる課題探索的調査のなかでそのように思わざるを得ない現実を少なからず目の当たりにしてきた。使用されていない井戸、校庭の真ん中に鎮座する井戸、子どもと教師のいない立派な校舎、教師の手に届けられないカリキュラムやシラバス、朽ち果てた木製の固定遊具、子どもの手に渡らない支援物資、などなどである。

いずれにせよ第２次調査の結果は、前回調査で感じ取った内容、すなわち①日本の体育の授業イメージをそのままカンボジアに持ってきても決して効果を上げることはないであろう、②カンボジアの現状（当事者の必要と要求）にマッチングした体育＝生活体育の可能性を探っていくことが必要であろう、の２点を改めて痛感させるものであった。

２．第３次（2012 年３月）第４次（2012 年 11 月）調査（運動会開催の提案と環境調査）

第２次調査で足を踏み入れた北部チョンカル村の学校の教育環境条件は想像以上に劣悪であった。とりわけ学校体育を実施するという観点からみると、教材・教具、施設の貧困は目を覆うばかりである。この悪条件では、2009 年にナショナル・カリキュラム上体育の授業が必修教科（週２時間）として設定されたとはいえ、到底実施されるはずもない。事実、訪問した学校の校長や教員に聞き取り調査したところ、「体育の授業を実施しようにも道具も施設もないので実施していない」「どうしていいかわからない」「クメール体操を指導するのがせいぜい」とする声がほとんどであった。

そこで第３次訪問では、前２回の課題探索的調査に続くセカンド・ステップとして、「カンボジアの現状（当事者の必要と要求）にマッチングした体育＝生活体育」の具体化に向けて、以下の５点からなる基本方針を持って臨んだ。

①いきなり「体育授業を実践しよう」などと、学校と教師に求めない（→体育の必要と意義

について、教師と子どもたちに感得してもらうことを優先する）

②現地の実情に合った（「それならやってみたい」と納得の得られる）体育を構想する

③背伸びをしなくても取り組める体育を構想する

④やってみて、徒労感でなく効力感の得られる体育を構想する

⑤当面はチョンカル小学校の一点突破に徹し、そこからクラスターの各学校への面的な広がり効果を期待する

こうした方針を胸に、チョンカル村の学校クラスターの中核校であるチョンカル小学校を再度訪問し、こちらから校長先生に対して提案を行った。その提案とは、村をあげての運動会（チョンカル小学校大運動会）の開催である。２回にわたる探索的調査では、カンボジアの学校においてどんな行事が実施されているのかについては十分に事情を知ることはできなかったが、運動会やクラスマッチなど季節的イベント型の体育行事ならば、必ずしも全校規模でなくとも学年単位あるいは学級単位と、その規模と内容・方法を問わなければおそらく体育授業よりももっと実現の可能性は高いと推察される。その際、日本の学校で実施されている体育行事をイメージする必要などないし、してはいけない。それぞれの学校が置かれた条件の中で可能な運営・計画を描き出すことができれば運動会を実施できるであろう。もちろんその場合も最低限の道具が用意されていなければならないことは言うまでもないが。

校長先生に日本の小学校で実施された運動会のダイジェスト版 DVD を視聴してもらいながら、単刀直入に「チョンカル小学校でこの運動会をやってみませんか」と提案した。“地域が学校に結集する”イメージが伝わるように、言いかえれば、地域づくりを意図した運動会を学校の中に組織していく構想を丁寧にかつ意識的に熱く語った。すると校長先生からは矢継ぎ早に質問が繰り出され、次第に「その気」になり、最後には「やる気満々」の意気込みを聞かせてくれた。こうして熱気のこもった論議の末に筆者と校長先生との間で取り交わされた確認書が**「チョンカル村大運動会の開催イメージ」**である。

チョンカル小学校大運動会の開催イメージ

日時：2013 年 1 月　午前 9 時から 12 時までの 3 時間

開催形態：山口大学教育協力ボランティアとチョンカル小学校の共催

協議を通じて確認された事項

・日本のプログラムと現地の伝統的な遊びをミックスさせ、事前練習を必要としない、観衆から笑いの取れるプログラムを組む

・準備や道具の調達にお金のかからない、身の丈に合った運動会にする

・国旗掲揚・校長挨拶・全体でのクメール体操・村長と教育委員会トップ、近隣の小中学校の校長先生の来賓招待

・屋台を校内に入れて飲み食い OK のにぎやかな運営

・来場者から学校運営への寄付を募る

・他教科で制作した絵や万国旗などを教室の外の壁等に張り出す等、合科学習的な運営とする

・清掃活動指導と連動させて前日準備

・赤・青・白組の縦割り集団で得点を競い、閉会式で優勝した組に校長杯を渡す（すべての子どもに鉛筆・ノートなどの参加賞を用意する）

・マイクや拡声器類はチョンカル小で、音楽と最低限の小道具は日本が用意する（日本で用意するもの・現地マーケットで購入するもの）　　etc

続く 2012 年 11 月の第 4 次訪問では、「チョンカル小学校大運動会の開催イメージ」の視点から、①学校の施設・道具・場所の調査・測量、②必要物品の現地マーケットでの調達可能性、③学生スタッフの現地での移動・宿泊・食事等の確保、④通訳スタッフとの打ち合わせ、等を実施した。

３．チョンカル小学校第運動会はこうして行われた（第 5 次訪問:2013.1）

以下では、チョンカル村大運動会の開催に向けて学生ボランティアが国内でどのような取り組みを進めてきたのか､そして実際に現地で開催された大運動会での様子について報告するが､その際、可能な限りピクチャを多用しながら報告したい。その理由は、この度の取り組み経過や運動会の実像を文章表現によって他者に伝えることは容易ではない、もっと言えばかなりの限界があるように思うからである。現場の臨場感を文章に表現する困難に加えて、仮に表現できたとしてもそこにはバイアスがかかってしまう。それに対しピクチャは筆者の手による脚色は介入できないため、そこから何を感じ取るかはそれを見る者の側に委ねられている。筆者としては、ここに張り付けるピクチャの数々から、チョンカル大運動会の開催に至る取り組みの経過と実像を読者の眼で感じ取ってもらえればと期待している。

１）運動会の開催に向けての学生ボランティアの取り組み（国内）

（１）プロジェクトの立ち上げ

第 1 ステップは、このプロジェクトに取り組む組織を立ち上げることであった。これまでの 4 次にわたるカンボジアでの現地調査の概要を筆者が担当する講義で学生に対して報告し、プロジェクトへの参加を呼び掛けたところ、13 名の学生が名乗りを上げてくれた。こうして筆者を含む 14 名で「カンボジアの子どもたちに学校体育の素晴らしさを届けるプロジェクト」が正式にスタートした。その後、他大学にも参加を呼びかけていき、結果、山口大学を中心に福岡地区 3 大学（中村学園大学・西南学院大学・近畿大学九州短期大学）の教員・学生総勢 50 名超のスタッフでボランティア活動を開始した。

（２）組織体制の整備

プロジェクトの運営は、学生スタッフによる自治的運営を基本方針とし、企画立案・運営・総括のすべてを学生の手に委ねた。組織体制は以下のとおりである。

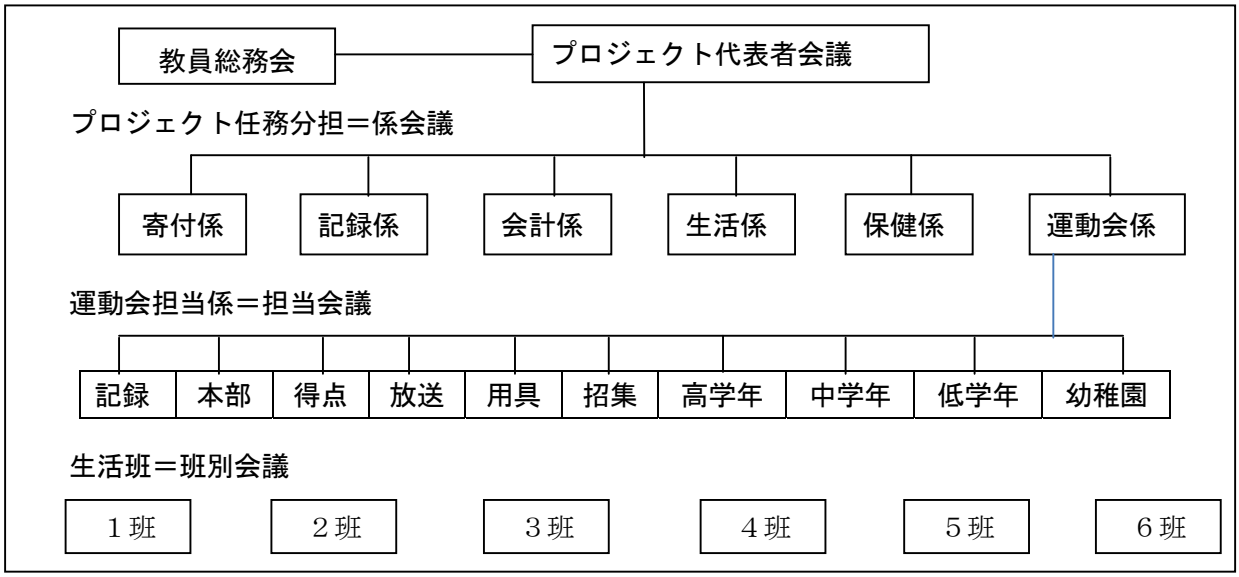

図 2　運動会プロジェクトの組織体制

（３）運動会グッズと文房具の寄付を募る活動

チョンカル村の子どもたちの学習環境は相当に厳しいものがあった。そこで運動会開催に合わせて参加賞として子どもたちに文房具を届けることを確認し、学生、市民、教育機関等に物品の寄付

寄付活動に取り組む学生スタッフ

寄せられた文房具の数々

を募る活動を展開した。新聞やテレビ・ラジオにも取り上げてもらい、4 か月間で予想を上回る文房具の数々が寄付として届けられた（その数、段ボールで 80 箱超）。

（４）競技種目の選定とプログラム作成

チョンカル小学校の子どもたち、先生たちさえも運動会は初めての経験であり、そのためどんな競技種目を選定するかが最も困難を極めた。最終的に「事前練習を必要としない」「観衆から笑いが漏れる」「道具にお金がかからない」の 3 条件を満たす種目として次の表のようなプログラムを決定した（種目名についてもクメール語に翻訳した時に児童がに理解しやすいように工夫した）。

表１　チョンカル小学校大運動会プログラム

時間	学年	種目名	内容
8:00	全体	開会式	
8:30	5 年	ボール運び競走	ボールが入ったかごのひもを持ち、ゴールまで落とさずに走る競走
8:45	1 年	手つなぎ競走	２人組で手をつないで走る競走
9:25	2 年	大切に運ぼうリレー	重ねた２個の段ボールを二人で落とさないように運ぶリレー
9:40	3 年	大きいパンツ競走	二人組で大きなパンツを履いて、協力しながらゴールまで走る競走
9:55	4 年	二人で３本の足競走	二人組で横に並んだ内側の足をひもで結んで、協力しながらゴールまで走る競走
9:00	5.6 年	へびが網をくぐるリレー	5 人がへびのように縦に並んで、途中の網をくぐり抜けて、次のへびにバトンを渡すリレー
10:15	幼稚園	どうぶつ体操	動物になって体操をする
10:20	幼稚園	お兄さんの尻尾を取ろう	子どもが男子学生を追いかけて、しっぽを取る遊び
10:30	1.2 年	悪魔をやっつけよう	台の上に乗った悪魔の人形を紅白玉で投げつけて落とすゲーム
10:50	6 年	キャンディ探し競走	途中に置いてあるキャンディを手を使わずに口で取ってゴールへ走る競走
11:05	3.4 年	玉入れゲーム	２チームに分かれて、高い場所にあるかごに玉を投げて入れて、入った玉の数を競うゲーム
11:20	教員他	玉入れゲーム	
11:35	全体	閉会式	

２）チョンカル小学校大運動会の実際

（１）現地での準備・打ち合わせ

初めて現地入りしたプロジェクトのスタッフは、事前学習を通じて思い描いていた環境と目の前の光景とのあまりの落差に戸惑いを見せていた。気持ちを切り替えてさっそく作業を開始する。各

初めて足を踏み入れたチョンカル村

ここが会場？どこで運動会するの？

担当係長の指示のもと、校庭の正確な測量、担当別配置図の確認、運動会ポスターの貼り出し、横断幕の設置等々、テキパキと進めていた。

学生は現地調査

張り出し作業も難航

村中にポスターの張り出し

ところで「学生による自治的な運営」という基本方針は、スタッフにとって実際は極めてハードである。なぜならあらゆる事柄は、それを決定し確認するために、担当係会議で協議・決定→プロジェクト代表者会議で協議・決定→全体会議で提案・確認と、幾重もの会議を経なくてはならないからである。加えて、そうした決定プロセスは異論なくスムーズに進行するわけではなく、とりわけ参加者それぞれが意見をもって臨んでいる場合には議論百出である。しかし、そうした経験こそが学生たちの中に行事の企画・運営能力を育てていく。

総務会

担当者会議

全体会議

ファイルで確認

（２）運動会前日の三つの活動－お絵かき・全校清掃・直前リハーサル－

運動会という行事を合科的･総合活動的に運営するために､運動会前日に三つの活動を組織した。

①お絵かき指導

学年ごとにテーマを設定して子どもたちに絵を描いてもらい、それを運動会で万国旗の代わりに飾り付けた。クレヨン・色鉛筆等はすべて市民から寄付されたものを使用した。彼らにとって真っ白な用紙にクレヨンで絵を描くこと、それ自体があまり経験しない活動のようであった。

絵を描く子どもたち

将来の夢

一枚一枚を丁寧に貼り付け

②全校清掃

この活動は、事前協議の中で校長先生から出された提案であった。いわく「子どもたちはゴミをポイ捨てする習慣が染みついている」「家庭でもゴミを集めて捨てる習慣がない」「だから清掃活動もいい加減になる」というものだった。そこで運動会を開催することと関わらせて､“ケガをしないためにも”、“地域の人々にきれいな学校を見てもらうためにも”､そして“自分たちもゴミのない、気持ちのいい教室で勉強できるために”清掃することの大切さを理解してもらうべく全校清掃を指導した。併せて学生スタッフはお手本として、校外に出ていき､幹線道路から校門までの 300m をゴミ一つない道路にするべく､地域の人々が見守る中を清掃活動に取り組んだ。

③直前リハーサル

直前リハーサルには二つの意味がある。一つには、学生スタッフが当日の本番を想定して計画通り進行するかどうか？また、想定外の問題が生じた際どのようにそれに対応するかのシミュレーションの意味である。もう一つは、子どもたちに明日の本番への期待を膨らませてもらい､また先生たちには計画の全体と運営（補

教職員会議で説明する学生

助）の実際を経験してもらうことである。その意味で直前リハーサルは軽視してはならない。そのために、まずは学生の各担当係長からチョンカル小学校の全教職員に向け、運営計画と依頼する補助の中身に関し説明をして共通理解を図ることが欠かせない。

その後、子どもたちに赤白帽子が配られ、通訳を介して競技方法について説明したのち、いざ実施競技にチャレンジ。しかし、なかなか子どもたちに理解が徹底されない。招集場所に待機するまでに時間がかかる。道具の移動が間に合わない・・・。シミュレーションで得られた課題はその晩の会議で検討され、計画修正されていった。

生まれて初めてかぶる赤白

通訳を入れて懸命に解説する

理解してくれたか

（３）本番－チョンカル小学校大運動会－

ここでは運動会の様子を時系列で追う叙述の方法は取らないで、運動会に参加した人に着目し、またなるべく筆者の解説を加えることを控えて読者にマン・ウォッチングしてもらうことで、繰り広げられた運動会の実像を捉えていただきたい。

①子どもたち

まずい。時間がかかりすぎる

これ！面白い

子どもたちの真剣そうな眼差し、そして満面の笑み。興味深かいことに、学校でも地域でも集団で競い合うという経験がない子どもたちにとって運動会は集団的一体感を味わうまたとない機会となったようだ。自分の出場しない競技にも興味津々で見つめ、声援していた。また現地ではクメール体操と呼ばれる定型化された体操が存在するが、今回は日本のラジオ体操を紹介した。

開会を待つ子どもたち

ニコニコ顔でラジオ体操

②教師たち

子どもたちの招集・誘導、競技の説明、助け舟を出す先生。こうして彼らもまた運動会の運営を学んでいく。そして圧巻は、たまらず飴喰い競争に飛び入り参加する先生たち。完全に運動会が作り出す世界・その雰囲気に魅了されていた。実際、一番熱くなっていたのは先生たちだったかも知れない。

③地域の人々

地域の人々にとって「日本から運動会とやらがやって来た」という印象だろう。その視線は、わが子、わが孫の一挙手一投足に向けられてばかりではない。競技する子どもたちが作り出す独特のスポーツ空間、そして運動会が醸し出す臨場感と一体感を感じてくれていたように思う。

④学生ボランティアたち

彼らはなぜここまでできるのか？流れ落ちる汗。潮を吹く肌。乾く喉。なぜ笑顔でいられるのか？それは彼らみんな、今この瞬間が「誰のための運動会なのか？」「何のための運動会なのか？」を頭とハートに刻み込んでいるからではないだろうか？下の写真に写る笑顔と涙のコントラストがいい。

時間が経つほどに感動と効力感が津波のように彼ら一人ひとりの胸に押し寄せてきたのだろう。

筆者はこう思う。「カンボジアの子どもたちに学校体育のすばらしさを届けよう」を合言葉に、彼らは出し惜しみすることなく「一肌脱いだ」。一肌も二肌も脱いだ彼らはカンボジアで成長した。まさに「一皮剝けた」ように思う。実は学生ボランティアが一番いい思いをしたのかもしれない。

４．地域とつながるということ

じつは、チョンカル小学校大運動会は裏側でもう一つのドラマが展開されていた。それは、現地の人々との形式ばらない、心温まる交流である。

１）学校の先生方との交流

当然のことながら、これまで出会うことのなかった生身の人間と人間同士、「運動会の成功に向けて協力しよう」と掛け声だけではうまくいかない。筆者らは現地入りした初日にチョンカル小学校の関係者全員を招いて親睦夕食会を開いた。なんと家族を含め 30 名近い人々が参加してくれ、お互いに胸襟を開いた交流でフレンドシップを互いに太くした。

２）地域の人々との交流

リハーサルの日、村の婦人方が学校の調理場を使って、学生ボランティアのために炊き出しをしてくれていた（下の写真左）。聞くところによると、学生ボランティアが校外の路地を清掃して回ったことと村の隅々に運動会開催を伝えるポスターを張り出していた姿に感動してのことだという。

また、運動会が終了して後片付けが終わった後、再び村の人々が「感謝のしるし」にと伝統料理を振る舞ってくれた（上の写真中央）。そして最後には、カンボジアの伝統のダンスをみんなで輪になって踊った（上の写真右）。当初「村をあげての運動会」「地域が学校に結集するイメージ」をもって臨んだが、こうした交流と歓待を受け、所期の目的はおおむね達成されたとの感を強くした。

５．次へとつながる二つの握手

今回の運動会プロジェクトは決して打ち上げ花火で終わらせてはいけない。そのことは当初よりプロジェクトのメンバーのすべてが肝に銘じていたことである。筆者は、カンボジアの地域に根差す体育（＝カンボジア版生活体育）の普及と振興への基本方針として「⑤当面はチョンカル小学校の一点突破に徹し、そこからクラスターの各学校への面的な広がり効果を期待する」を挙げていた。この度のチョンカル小学校での大運動会は、第一にチョンカル小学校の校長先生はじめ教職員、子どもたち、そして地域の人々に運動会のもつ文化的価値＝教育的価値を感得してもらうことがねらいであった。しかし同時に、この大運動会にチョンカル村の他の小・中学校の校長先生はじめ教育

行政の責任者に立ち会ってもらい、「おらが小学校でもやってみたい」「行政としてクラスター全域に広げていきたい」と感じてもらうことも大切なねらいであった。ここに二つの握手を載せておこう。下の写真左は、チョンカル小学校の校長先生と握手を交わしているもの、右の写真はチョンカル教育事務所の副所長さんと握手を交わしているものである。多くを語る必要はないであろう。

「感動しました。運動会をこれから先、チョンカル村の小中学校全体に広げていきたい」「いつでもお手伝いさせていただきます」

「私たちはこれからも協力を惜しみません」と笑顔で返答した。

取り組みを振り返って

筆者は、2011 年より山口大学教育学部の国際教育協力プロジェクトに加わり、学部のリソースを生かしながらカンボジアの教育振興への支援活動を進めてきた。しかしながら、2009 年にカンボジアで本格実施となった体育科に関しては、現状はほとんど取り組まれていないにもかかわらず、どのような支援が可能なのかについて方向性を見出すことができない中、課題探索的調査として 2 年間、現地を訪問してきた。そしてようやくこの度、運動会にその可能性を託して実践を試みる段階にまで至った。取り組んでみて、確かな手ごたえに似たものを感じることができたという意味では、大きな一歩であったように思う。

また、この実践報告は執筆している筆者自身、感情移入の強い散文調に流れていることを自覚している。しかしそれは現地でその場に立ち会った者としてはやむを得ないとも感じている。なぜなら、それほどにインパクトの強い活動であったからである。写真を多用したのも筆者自身の解釈をなるべく控えたいとする思いからであったが、3,000 枚を超える写真と 10 時間を超える動画の中からここに載せた写真を選び、切り取ってくる作業それ自体に筆者の解釈が関与していることも避けがたかった。

ともあれ、この度の取り組みは山口大学教育研究後援財団、同国際協力活動推進プラットフォーム、さらには学長裁量経費および教育学部長裁量経費から本プロジェクトに対し活動費を助成いただいたことで実現できた。また、山口県下の個人・団体・企業、さらには全国の市民から、「カンボジアの子どもたちに」と、鉛筆・ノート・消しゴムなどの文房具、運動会に使用する赤白帽子等、多くの物品の寄付をいただいた。これらの寄付は、新聞・テレビ・ラジオなどメディアが本プロジェクトの取り組みを報じてくれたことによって一気に加速した。寄せられた物品は、現地の子どもたちに運動会への参加賞として直接手渡すことができた。多くの方々の善意に対し、心より感謝したい。

筆者はこの度のプロジェクトの取り組みを通じて新しい発見をすることができた。それは次のようなことである。筆者らはカンボジアに「支援」活動に行ったのだが、その「支援」活動は実は多

くの人々からの「支援」を受けて初めて実現できたことであり、一つの「支援」(＝学校体育の振興)は別の「支援」(＝運動用具・文房具等の寄付）があって成立すること、その別の「支援」もまたもう別の「支援」(＝メディアでの広報や SCN での呼びかけ）の上に成り立っていて、結局のところ、「支援」とは単体ではありえない、「支援」の連鎖であり、人と人の連鎖なのだということである。この感覚は筆者にとって一番の収穫であった。このことを胸に刻みながら、2013 年 11 月に予定のチョンカル村大運動会、バージョンアップした第 2 弾に向け、新たな取り組みを始めていきたいと考えている。

付記：ここに報告した「カンボジアの子どもたちに学校体育の素晴らしさを届けるプロジェクト」の取り組みは、山口大学教育学部国際教育協力プロジェクトの活動の一環であり、同時に山口大学（主管)、中村学園大学、近畿大学九州短期大学および西南学院大学の 4 大学共同のボランティア活動の成果である。

註および参考文献

・内田雄三・鈴木 聡(2008)「カンボジア体育」の明日への架け橋となって③、体育科教育. 56(6). p. 58－59.

・潮木守一(2007) 現場からみた国際教育協力. 国際教育協力論集. 10(3). p. 1-8.

・海野勇三 (2011) カンボジアの子どもたちに学校体育を－私たちに何ができる？現地ではどんな支援が求められているのか？－. p. 24－34、和泉研二、友定保博、海野勇三 (2011 年 6 月)：カンボジア王国 SiemReap 州教員研修支援のモデル構築に関する研究　平成 22 年度　実施視察報告書.
(http://www.edu.yamaguchi-u.ac.jp/wp-content/uploads/2011/06/cambodia2.pdf)

・海野勇三 (2012) カンボジアの子どもたちに学校体育を (2) －現地が求める教育支援と私たちに可能な支援のマッチングを求めて－. p. 7－23、和泉研二、海野勇三、佐伯里英子、田中大輔、林 秀晃、阿部弘和 (2012 年 4 月)：カンボジア王国 SiemReap 州教員研修支援のモデル構築に関する研究　平成 23 年度　実施視察報告書 (2).
(http://www.edu.yamaguchi-u.ac.jp/wp-content/uploads/2012/08/cambodia3.pdf)

・楠 輝義 (2010) 学校教育環境改善報告書　シェムリアップの教育　(製本版) p. 1－57. JICA・SV 19 年度第 4 次隊として、シェムリアップ州教育・青年・スポーツ局で支援活動に取り組んだ楠 輝義氏は、この中でシェムリアップ州の教育をめぐる現状と改革の現段階についてデータをもとに詳細に報告している。

・カンボジア学校体育スポーツ局 (2007) 小学校保健体育科指導要領 (日本語訳版). P. 1－68. なお本冊子は 2011 年 12 月に日本の NPO/NGO として支援活動を続けている Hearts of Gold のプノンペン事務所を訪問した際に頂いたものである。同時に学年別のシラバス (クメール語版) もいただいたが、残念ながら言語の壁でいまだ資料として使用できていない。

・Taku Yamaguchi(2010) New PE and Sport Education phase in Cambodia, The International Conference for the 30th Anniversary of the Japanese Society of Sport Education, PROCEEDINGS, p.48-54.

・松本格之祐・清水　由・木下光正 (2008)「カンボジア体育」の明日への架け橋となって②、体育科教育. 56(5). p. 54－55.

・村田敏雄 (2004) 日本の教育経験　国際協力研究　20(1). p. 7-16.

・山口　拓 (2012) カンボジアにおける教育政策に関する一考察：体育科教育の普及課題. 体育学研究. 57:297－313. この中で山口氏は、「『乾季の日陰対策』と『雨季の水溜り対策』は、カンボジ

ア各地の学校にとって生命線である」と述べている。

・山口　拓・岡出美則(2008)「カンボジア体育」の明日への架け橋となって①、体育科教育.56(4).p.64－65.